



アッツ島山崎部隊 玉砕の想い出

伊佐二久 陸士55

『偕行』誌10月号で今野茂雄氏の「アッツ島守備隊長 山崎大佐」を拝読し、その当時救援の動員下令を受けた者として思い出を述べさせて頂くことにした。

私は陸軍士官学校を卒業後、北海道旭川の第7師団歩兵第26聯隊に所属していた。

昭和17年、聯隊の穂積大隊にアッツ島（和名は熱田島）占領の命令が下り上陸、同期生の故熊谷愀君と送別の席でお別れしたのを記憶している。

その頃は米軍はおらず無血占領であった。昭和18年（1943）7月9月の作戦を北方ヶ号作戦と称した。その後、穂積部隊はキスカ島に移動し、アッツ島に山崎部隊が上陸した。その頃から、米軍の空襲や砲撃が激しくなり、5月12日米軍部隊がアッツ島に上陸を開始した。この時、歩兵第26聯隊に山崎部隊救援の動員が下令され、私たちは張り切って準備していた。

ところが明日小樽港から出発という直前、大本営から中止命令が下り、戦死覚悟で勇んでいった私たちはがっかりしたものである。

もっとも行つていれば米空軍の爆撃か潜水艦の魚雷攻撃で海の藻屑になつていたのであるが。

山崎部隊は圧倒的な米軍戦力に、やむなく玉砕せざるを得なかった

が、詳細は『偕行』誌にあるので省略する。

キスカ島には5千名の日本兵が残っており、救援のための方策が検討されていた。はじめ潜水艦による作戦が計画されたが失敗、海軍の協力で、指揮官木村海軍少将、旗艦阿武隈の駆逐艦隊が編成された。7月22日、濃霧の予報があったので、28日キスカ島に近づくと霧が晴れたため救援を中止し一時引き揚げた。

このことがマイナスとして批判されたが、もしも強行していれば米軍艦隊と遭遇して大きな損害を受けたであろう。

後の濃霧利用で成功しているのも、むしろ賞賛されるべきと思つている。

7月29日は物凄い濃霧でほとんど視界はゼロ、米海軍も一カ所に集まり日本艦隊のことは不明であつたらしい。

おかげで日本艦隊は敵の妨害を全く受けることなく短時間で救助に成功している。樋口中将の指示で日本軍の小銃など兵器はすべて海中に投棄し着の身着のまま駆逐艦に乗り移り短時間で救助に成功した。

このことを全く知らない米軍は、その後激しい艦砲射撃と空爆を行つて上陸、同士討ちで死亡した米兵もいたらしい。

その頃、私は北千島幌筵島の守備についていたが、帰国した熊谷君と会つて無事をお祝いした記憶がある。

以上、山崎部隊の文を拝読して当時の思い出をご報告させて頂いた。